

光より速いもの

一九八六年四月

一九八六年の四月。僕は二七歳の大学院生で、夜空をマニラに向かう旅客機に乗っていた。その年の二月、「黄色い革命」でマルコス政権が打倒された、そのあとのフィリピンを是非この目で確かめたいと思って旅立ったのである。しかし、この旅で圧倒的な印象を僕に残したのは、何よりも実は、フィリピンに向かう機内で隣り合わせた一見ヤクザ風のMさんの思い出である。

ヤクザ風の人と隣り合わせること自体はそんなに珍しいことではないだろう。でもMさんは、ものすごく、おしゃべりだった。

「牛久はねえ、主婦売春の巣窟なんだよ！」

「ええ？」

「あそこは今すごいでしょう、ニューファミリーが無理して買うわけよ、マイホーム。しかしね、ああいう人たちは本当に知らない！まったく知らない！金を！金の借り方を！返し方！使い方！稼ぎ方！何にも知らない！」

「亭主の安月給じゃローンを返せない！というわけで最初はパートに出るんだが、これがまた雀の涙。自給五〇〇円じゃどうにもならないでしょ？てんで、バーだの、スナックだので働くようになる。こういうところなら軽く一〇倍は稼げる。第一こっちの方が楽しだし、楽しい！ところがね、こういう仕事を始めるとね、みるみる金遣いが荒くなっちゃうのよ。ああ、女とは愚かだから！仕事のためには化粧だ、衣装だ何だとね……それで結局、金が足りなくなる。いいですか、金を返すためにはじめた仕事がよく、逆に金遣いを荒くする、もっと稼がなくなっちゃならない、もっと金遣いが荒くなる、ローン返済どころじゃなくなってくる、それでもローンは払わなくなっちゃならない、で、亭主の内緒でサラ金に手を出す。判で押したように同じだよ！挙句の果ては売春だ。サラ金のヤクザ屋さんが紹介するわけ。これがバーだのスナックだのより金になる、当たり前だ、売春の方が楽しだし、楽しいってことになる、しかしまた足りなく

なる、なぜかって？十中八九、覚せい剤に手を出すからよ。で、またサラ金だ！本当に多いんだ、牛久にゃ！

「亭主が勘付いた時には九九パーセント手遅れだねえ！おかみさんはもう身も心もボロボロになってるし、サラ金で家のローンどころじゃない、身ぐるみはがれちゃう。そこで私の出番が来るわけなんだ！」

Mさんは、茨城県では知る人ぞ知る「整理屋」さんなのだそうだ。Mさんによれば、茨城県は借金地獄に陥った新興宅地のニューファミリーと没落農家の阿鼻叫喚が渦巻いているという。Mさんは長年の経験で得た豊富な法律知識と口八丁手八丁を駆使して借財を整理し、彼らを「新生活」へと導く仕事をしているのだ。

——なんていうと地獄に仏かと思われるが、実はMさんの仕事は借金地獄の言わば仕上げである。Mさんは抵当に入った家、土地、財産の転売で利ざやを稼いでいるのだ。彼の屋敷の応接間には、連日、茨城県民を餌にした一連のマネーゲームに興じる銀行、サラ金、ヤクザ、手形屋、詐欺師でゴった返しているという。

「お百姓さんがまたぜんぜんお金の使い方を知らないね！鹿島の開発、つくばの学園都市、科学万博じゃあ、本当に稼がせてもらいました！土地を切り売りして金が転がり込むと、駄目なんだー、使っちゃうんだよ。」

「こういうところをさすらう詐欺師がいる。いや、彼らは芸術家だ！」

Mさんによれば、本当に優れた詐欺師というものは、ひとつの仕事に五年をかける。これと思う大農家に目をつけると、慎重に近寄り、数年をかけて信頼を獲得し、やがて会社設立話をもちかける。巧みな話に乗せられて、出資者となり、会社の専務取締役になる。今までタオルを首に巻いて鍬を握りトラクターに乗り田畑で一日を過ごしていたお百姓さんが、突然、ネクタイを締め毎朝ベントのお迎えを受ける。会社が何をやっているのかはよく分からない。おま

けにベントも何も全部、自分のお金でやっているわけだがそれもよくわかってはいない、ただもうなんだか自分が偉くなったような気がする。そして、毎晩、スーツ姿でナイトクラブに出入りして、あーら専務さんなんて言われて良い気になる。

そして突然おとずれる破局。全幅の信頼を置いていた共同経営者はフツと姿を消し、いつのまにか彼は巨額の負債を抱えているのだ。そのときにはじめて、一体この会社が誰の金で運営されていたのかに気がつき、また、この会社が何をしているのか、いや何もしていないということに、それをまた自分がぜんぜん知らなかったことに気がつく。こうしてMさんの出番がやって来るのである。そして全てを失ったお百姓さんは、その余生を夜警などをして過ごすことになるのだという。

「このまえ彼（詐欺師）が来てねえ、今どこで何しているか聞いたら、言うんだよ、Mさん、いま埼玉にいます、あと二年、あと二年です。二年待って下さい、あと二年でうまく行きますってね

「神田神保町の喫茶店Aに行ってみなさい、客の八割方は詐欺師だよ！あのR事件で有名なO氏のK興業なんてのは会社なんていうのもおこがましい、一大詐欺師集団とすべきだね！本社ビルのロビーに行ってみなさい。いるわ、いるわ、驚くべきもんですわ！」

話を聞いているうちに、僕は何か恐ろしい国ニッポンから平和の国フィリピンに脱出する難民のような心持になってきたのだった。

さてそんなMさんが今なぜマニラ行きの夜の旅客機に乗っているかというと、案の定、マニラに2号さんがいるのである。

そしてフィリピンでもMさんは「整理屋」気分が抜けない。

2号さんの父親は一年前に死んだ。彼は長らくミンダナオ島のとある州で役人をしていた。そして「蓄財」に励み、ミンダナオ西部の山奥に大ココナツ農園を経営するに至ったのだそうだ。それでは大金持ちになったかというところ、こ

れも珍しいこととは言えないが子作りにいささか励み過ぎ、息子・娘あわせてなんと二五人、孫も合わせると一族郎党二五〇人にもものぼる。おかげでようやくの思いでマニラに出てきたMさんの2号さんがミンダナオの故郷に戻るたび、ワツと乞食同然の甥や姪たちが押し寄せてきて贈り物をねだり、兄弟にも幾ばくかと金をやらねばならない。これじゃあ、たまらない、何と言っても二五〇人だ。もういやだ。私は何のためにマニラに出てきたのか。美容師になるためなのに！

というわけでMさんの出番がやって来た。

「そういうわけだね、ミンダナオの奥地まで私が行ってだ、農園全部売り払ってだ、兄弟にあんたはこれだけ、あんたはこれだけと分けて、きれいさっぱりしてね、それでマニラに家つきの土地を買った。アキノになったでしょう。こういうことでムードが変わると土地の値段は上がるからね。ちようど牛久みたいな新興の郊外宅地があるんだ。こういうときは思い切り良く買わなくちゃいけない。」

「はあ」

そんなMさんは二月革命後、最初にセブ島ツアーをした団体（Mさんの会社連中を誘った）を率いた。そこで彼らが出会ったのは、革命などほど吹く風で、依然として金持ち日本人にすり寄ってくるフィリピン人の姿だったという。制服警官がやって来て、あわれっぽい目で体をくねらせ、腕章、バッジ、ボタン、果ては制服上着からピストルまで売ろうとした。Mさんたちは面白半分に囃したて、とうとうその警官を裸同然にしてしまったのだそうだ。

「いやあ、この国は何と言っても金がものを言う！一〇〇年たっても変わらないだろうねえ！暑すぎるのかねえ！」

だいぶたったところで、ところであなたは何をやっているんですか？と聞か

れて、歴史学やってます。米比関係史やってます、と言うと彼は目を丸くして驚き、心から不思議そうに言うのだった。

「世の中に学問をする人がいる。いやはや、僕の話もあなたにはびっくりすることだらけだろうが、私らに言わせれば学問で生きてゆくっていう人たちこそ全く解らない。いや、私らの周囲にはいないものだから、不思議でしょうがないですよ！」

Mさんの語る世界に呆然として聞き入っていた僕としては、そんなことを言われても返す言葉がない。

Mさんはかまわず、自らの軍国少年だった幼少の時を回顧し、貧しかった戦後を振り返り、やがて子供たちの話を始めた。上の息子はK大学を出て今や大手S銀行に勤める生真面目で口数少ないエリートサラリーマンである。下の娘は中学二年生だが、これが全国にファンをもつ少女漫画作家であって、せつせと同人誌を作っては全国に発送し、何と全国からの送金で黒字にしているという。

「この子が全く勉強しない。学校じゃ完全に眠っているらしいんですよ。成績はむちゃくちゃ、髪はボサボサ、まるで化粧しない、歯もろくに磨かない。もう漫画、漫画で他のことが全く頭にないんだな。まあーねえー、漫画じゃこれはどうしようもない、心配なんですがねえ。英語は好きで勉強してるみたいだが・・・漫画じゃねえ！全く解りませんな！」

僕はちよつと機嫌をとってあげた。

「しかし、そういうことを通じてずいぶんビジネスというか、勉強をしているわけでしょう。しっかり黒字にするところなんて、お父さん似なんじゃないですか？」

Mさんは満面に笑みを浮かべた。そうかなあ？そうかな、そうかもしれない、いやそうだねえ、似ているのかも知れませんが、確かに、うん！うん！

「いや、しかし漫画だからねえ！

「……まあ、でも」

と、手にしている週刊文春を指さして、

「まあ、自殺はしないと安心はしているんだ」

と言った。ちようど、歌手・岡田有希子の自殺事件をめぐって少女の自殺が特集記事になっていたのである。

いつのまにかベルト着用のサインが出ていた。着陸が近づいている。

「しかし、学問だ、漫画だと、世の中には不思議なことを考える人がいるもんだ。しかもまたそれを仕事にしているというからこれは全く驚異だねえ！

「いや、そういえば家の息子もサラリーマンやっているけれど、変なことを言うんだなあ。子供のときから天文学が好きでね、星ばっかり見てるんですわ」

「ほお、天文ですか」

整理屋の父、天文ファンのエリート銀行員の息子、漫画家の娘、二五〇人からの係累を抱えたマニラの2号さん。茨城牛久の阿鼻叫喚とフィリピンの貧困を結ぶ「整理屋」Mさんとは一体何者だったのだろうか。マネーゲームについては人の及ばぬ該博な知識の持ち主であり、口調は荒っぽいのが、実は以外に端正な日本語を喋り、その容貌たるや……やっぱりヤクザ！現実とはかくのごとく想像力を超え――

「息子が最近、妙なことを言う。」

「世の中には光よりも速いものがあるんだって？それは解るんだ、現実には音より速いんだから、光よりも速いものがあつたって構いはしないでしょな。」

「でも息子が言うんだけど、その光よりも速いものっていうのは、なんだ、未来から来るんだって？」

「その未来から、ものが来る、っていうことなのかな？タイムマシンのことですか？するとさぞや便利だろう！TVで写せたらこれは最高ですな。これは仕事に使える！しかしですよ、なんで光より速いと未来から来るっていうことになるんですかね？」

「いやあ、僕は歴史ですから——」

「それから、動く時間が遅れるっていうのはどういことかね？しかもそれを実験した人がいるんだって？すごく精密な時計をびったし合わせて、二人の人間につけさせて、ズレをはかるんだって？」

解らない！不思議だ！世の中には不思議な人がいるものだ！

その光より速いものを探している学者がいる！って息子は言うんだなあ！

いやはや、びっくりしてしまう。

世の中にはまったく計り知れないことを考える人がいる——

マニラに到着すると、Mさんは僕に五〇〇〇円札を両替してくれと頼んだ。

一〇〇〇円札を袖の下に使おうという訳だ。そして入国手続きに向かいながら、いや、フィリピンはまだまだ金がものを言うところだから！と言い、からからと笑いながら去っていった。

(二〇〇四年七月改稿、二〇一〇年三月誤字脱字修正)